

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：26402

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13903

研究課題名(和文)2過程モデルによる外集団先制攻撃の心理メカニズムの解明

研究課題名(英文)The dual-process model of preemptive strike toward out-group members

研究代表者

三船 恒裕(Mifune, Nobuhiro)

高知工科大学・経済・マネジメント学群・准教授

研究者番号：00708050

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,700,000円

研究成果の概要(和文)：個人間の先制攻撃ゲームを用いた実験により、相手の攻撃力が高い場合に外集団への攻撃が促進されるという現象は必ずしも再現されず、限定された条件でのみ生じることが示唆された。一方、新しく開発した集団間対抗先制攻撃ゲームを用いた実験の結果、個人単位の先制攻撃と集団単位の先制攻撃の間の相関は弱く、また、集団間攻撃に対する協力と集団内の資源を増やすための協力との間に関連が見られないことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

極端な例としての戦争も含む集団間葛藤問題は我々が解決すべき課題のひとつである。外集団に対する攻撃がなぜ、どのようにして生じるのかを理解することは集団間葛藤問題の解決にもつながると考えられる。本研究は、これまで集団内の協力とあまり区別されずに扱われてきた集団間の攻撃がそれぞれ別の心理によって生じうる可能性を示したことで、そして外集団への攻撃が集団内協力ほどは容易に生じないことを示した点で学術的にも社会的にも意義ある研究だと言えるだろう。

研究成果の概要(英文)：Experiments using the inter-individual preemptive strike game suggested that the result of promoting attacks on out-group members when the opponent has more aggressive power is not always replicated and occurs only under limited conditions. On the other hand, experiments using a newly developed intergroup rivalry preemptive strike game showed that the correlation between individual and group preemptive attack was weak, and that there was no relation between cooperation for intergroup attack and cooperation to increase resources within the group.

研究分野：進化心理学

キーワード：集団間バイアス 内集団ひいき 外集団攻撃 先制攻撃

1. 研究開始当初の背景

戦争をその極端に暴力的な例とするように、集団間葛藤は人々の生活の中で多く生じている。集団間葛藤問題がなぜ生じるのかという問いは社会学や政治学、経済学などの幅広い学問分野で検討されてきた。社会心理学においては内集団バイアスが集団間葛藤の原因のひとつとなりうるとして、多くの実験研究が積み重ねられてきた。特に重要なのが最小条件集団実験 (Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971) である。画面上に表示される点の数を過少あるいは過多に見積もるか、あるいはクレーの絵とカンディンスキーの絵のどちらを好むかといった些細な基準で分けられただけの集団(最小条件集団)においても内集団バイアスが生じることが繰り返し観測されている。最小条件集団にはおおそ集団を区別する理由(ステレオタイプや集団内・集団間の対面的な相互作用・相互依存性、過去の葛藤の歴史など)が存在しないため、内集団か外集団かという基準のみで人々は内集団バイアスを起こしうると考えられてきた。また、最小条件集団の内集団バイアスは学生だけでなく幅広い年代でも観察され、また、多くの文化圏でも観察されることから、進化的な起源についても議論されている。

山岸らの研究グループ (e.g., Yamagishi, Jin, & Kiyonari, 1999) は閉ざされた一般互惠性仮説 (Bounded Generalized Reciprocity: BGR) を提唱し、内集団バイアスの進化的起源と心理メカニズムに関する仮説を提示した。BGR は見知らぬ他者への利他行動を説明する進化理論のひとつである、間接互惠性理論に依拠する。間接互惠性とは、見知らぬ他者に対する利他行動は、その行動が第三者に対してポジティブな評判として共有され、人々がその評判情報をもとに利他行動を行う相手を選別することで、進化可能となると説明する。この間接互惠性が働く範囲が「集団」であると人々は直感的に認識していると BGR は仮定する。その上で、最小条件集団状況では、クレー集団やカンディンスキー集団という集団の手がかりを間接互惠性の手がかりとして使用するために内集団バイアスが生じると説明される。この BGR を支持すると知見としては、相互作用を行う相手が参加者の所属集団を知っている場合には内集団バイアスが生じ、知らない場合には内集団バイアスが生じないという知見が多く報告されている。

BGR の主張としてもうひとつ重要なものが、内集団バイアスは内集団に対する協力性として生じ、外集団に対する攻撃性としては生じないという点が挙げられる。例えば囚人のジレンマゲームによって協力行動を測定した場合、どちらの集団かわからない相手と外集団相手とで協力率は変わらず、それらよりも内集団相手に対する協力率が高くなるというパターンが多く観察されている (e.g., 神・山岸, 1997)。一方で、進化論的には人々が外集団攻撃も含む内集団バイアス傾向を持つと主張する研究も存在する (Choi & Bowles, 2007)。囚人のジレンマゲームでの非協力を攻撃行動として解釈するのは不適切なため、攻撃行動を測定する実験パラダイムで内外集団への攻撃率を測定する必要がある。

コストのかかる外集団攻撃を測定するための実験パラダイムとして開発されたのが先制攻撃ゲームである。このゲームでは参加者は相手と 2 人 1 組になり、元手のお金 (例: 500 円) を実験者から与えられた上で、パソコン画面のボタンを押すかどうかを決める。ボタンを押すと相手から大きな金額 (例: 400 円) が差し引かれる可能性があるが、押した方も小さな金額 (例: 100 円) を支払う必要がある。お互いにボタンを押した場合は早押しで決まり、早く押した方のボタンが有効となり、遅い方は無効となる。制限時間 (例: 30 秒) 以内にお互いにボタンを押さなければ元手の金額をそのままもらって実験終了となる。この先制攻撃ゲームを用いて最小条件集団における内集団相手と外集団相手への攻撃率を比較すると有意な差は見られないことが示されている (Simunovic, Mifune, & Yamagishi, 2013)。一方、攻撃力の強さ (減らす金額の大きさ) が非対称なゲームを用いた場合、相手の方が自分よりも攻撃力が強い場合において内集団相手よりも外集団相手に対する攻撃率が高まるという結果も報告されている (三船, 2016)。つまり、最小条件集団においても攻撃力が非対称な課題では外集団攻撃が生じる可能性が示されているが、この研究はまだ再現研究がなされておらず、頑健な結果であるかに疑問が残っている。

2. 研究の目的

本研究の目的は外集団攻撃が生じる要因を明らかにすることにある。攻撃力の非対称性が外集団攻撃を生じさせるという先行研究に対して、再現実験を行って頑健性を確かめる。その上で、相手の攻撃力が高い場合に見られた外集団攻撃がどのような心理メカニズムによって生じるのかを 2 過程モデルに基づいて検証する。無自覚・無意図的で自動的・早い処理に特徴付けられるシステム 1 の働きで外集団攻撃が生じているのであれば、認知負荷を高められた状態でも外集団攻撃が生じるだろう。一方、意識的・自覚的で熟慮的・遅い処理に特徴付けられるシステム 2 の働きで外集団攻撃が生じるのであれば、認知負荷をかけた場合は外集団攻撃は生じなくなるだろう。また、「攻撃力の高い外集団の人間はこちらに攻撃してくるだろう」という予測 (主にシステム 2 に基づく予測と考えられる) が外集団攻撃を生み出すかどうかを検証するため、外集団攻撃の予測を検証する実験も行う。

3. 研究の方法

(1) 被験者内デザインによる追試

攻撃力の非対称性を操作し、条件を被験者内で配置する先制攻撃ゲームを実施した。実験デザインは相手の所属集団（内集団・外集団・不明集団）と、攻撃力の非対称性（相手よりも自分のほうが攻撃力が高い・自分よりも相手の方が攻撃力が高い）の2要因を独立変数とし、先制攻撃ゲームのボタン押し行動を従属変数として測定した。参加者は6回の先制攻撃ゲームを行なったが、各回のゲームの結果はフィードバックされなかった。また、ボタンが画面に表示される前の30秒間、相手の所属集団や攻撃力の非対称性情報を参加者に提示し、考える時間を設定した。参加者は54名であった。

(2) ウェブ実験による相手の攻撃予測の測定

場面想定法を用いて参加者を最小条件集団に分類し、攻撃力の非対称性がある先制攻撃ゲームにおいて、相手がどのくらいの確率でボタンを押すと思うかを推測させた。クラウドソーシング会社によって参加者を募集し、1212人が参加した。

(3) 集団対抗先制攻撃ゲームでの集団間攻撃と、公共財供給ゲームでの集団内協力との関連

新たに集団対抗先制攻撃ゲームを開発した。例えば10人でこのゲームを行う場合、参加者はランダムに5人ずつの集団に分類される。それぞれの個人は画面上に表示されるボタンを押すかどうかを決定する。ボタン押しの結果は、内集団と外集団のどちらのほうが多くボタンを押したのか、どれだけ早くその人数に到達したかで変わる。ボタンを押した人数が多い集団はボタン押しが「成功」したことになり、ボタンを押したためのコストである少額のお金がボタンを押した人だけから差し引かれる。一方、ボタンを押した人数が少なかった集団は相手のボタン押しの被害を受け、自身がボタンを押したかどうかにかかわらず一律に多額のお金が差し引かれる。ボタンを押した人数が同数の場合、ボタンを押した人数がその人数に早く到達した集団が「勝ち」となり、遅く到達した集団は「負け」となり、それぞれ上記の結果になる。また、全員がボタンを押さなければ全員が元手のお金をそのまま受け取ることができる。つまり、相手の集団に負けそうだと思うのならボタンを押した方がいいが、自分の集団が勝つと思うのであれば自分はボタンを押さない方がいい。このように他者のボタン押しにフリーライドするインセンティブがある状況での外集団に対する攻撃行動を測定した。これとの関連を検討する対象として、個人単位の外集団攻撃の指標として最小条件集団の外集団を相手とした通常の（一対一の個人間の）先制攻撃ゲームと、他の外集団攻撃の指標として集団間囚人のジレンマ・差の最大化ゲーム（IPD-MD）、集団内協力の指標として公共財供給ゲームを実施した。研究3-1では集団対抗先制攻撃ゲームと個人間先制攻撃ゲーム、公共財供給ゲームを実施し、研究3-2では集団対抗先制攻撃ゲームとIPD-MD、公共財供給ゲームを実施した。

(4) 「盗む」フレームを操作した集団間囚人のジレンマ・差の最大化ゲーム（IPD-MD）

外集団攻撃の進化的期限を説明する共進化モデル（Choi & Bowles, 2007）に基づき、外集団への攻撃が内集団にとっての利益になるというフレームを付与した集団間囚人のジレンマ・差の最大化ゲーム（IPD-MD）を実施した。実験は2つ行なったが、手続きは同一であった。参加者はひとつの集団の人数が3人から5人になるように、二つの集団のうちひとつの集団にランダムに分類され、元手の中からいくらかを手元に残し、いくらかを集団内プールに投資し、いくらかを集団間プールに投資するかを決定した。集団内プールに投資した金額は2倍にされて内集団成員に平等に分配された。集団間プールに投資した金額も2倍にされてない集団成員に平等に分配されたが、投資した金額と同額が外集団成員から差し引かれた。このとき、「盗む」フレーム条件では外集団成員から差し引いた金額が投資金額に上乘せされることで、集団間プールの投資金額の2倍の金額が内集団成員に分配されると説明された。一方、統制条件では実験者が投資金額と同額を上乘せすることで、集団間プールの投資金額の2倍の金額が内集団成員に分配されると説明された。このIPD-MDを一回だけ行なった。研究1では73人が、研究2では107人が実験に参加した。

4. 研究成果

(1) 攻撃力に依存しない外集団攻撃

相手の所属集団（内集団・外集団・不明集団）と攻撃力非対称性（自分が強い・自分が弱い）を独立変数とした一般化線形混合モデルを用いた分析を行ったところ、所属集団と攻撃力のそれぞれの主効果が有意となった。非対称性に関しては、自分が弱い時の方が強い時よりも攻撃を行う傾向が見られ、これは先行研究で見られた結果と一貫していた。所属集団に関しては外集団の攻撃率が内集団の攻撃率を上回る傾向が見られたが、最も攻撃率が高いのが不明集団の場合であった。また、不明集団と内集団との間には有意な差が認められたが、不明集団と外集団、内集団と外集団との間には有意な差は認められなかった。したがって、外集団攻撃が生じたとは解釈しにくい。実験では相手の情報出してから本番まで待たせており、これによってシステム2が働きやすくなり、外集団攻撃が抑制された可能性も考えられる。

(2) 攻撃予測における外集団バイアス

相手の所属集団（内集団 or 外集団）と攻撃力の非対称性（自分不利・同等・自分有利）と回答

順序（推測が先 or 行動選択が先）を独立変数とし、相手がボタンを押してくると思う確率を従属変数とした分散分析の結果、相手の所属集団の主効果のみが有意であった。これは、相手が内集団の場合よりも外集団の場合に、より高い確率で「相手はボタンを押してくるだろう」と予測していたことを示している。行動の意図を従属変数とした同様の分散分析の結果、所属集団と回答順序の交互作用効果が有意であり、最初に行動意図を測定した場合にのみ、外集団に対して内集団よりも高い攻撃意図が見られた。これらの知見は、攻撃予測における外集団バイアスを示す結果であると同時に、先行研究とは一貫しない結果でもある。攻撃力の非対称性が存在する場合にのみ見られた外集団攻撃が、相手の攻撃の推測から生じたのか否かに関しては結論を保留した方がよい結果だと言えるだろう。

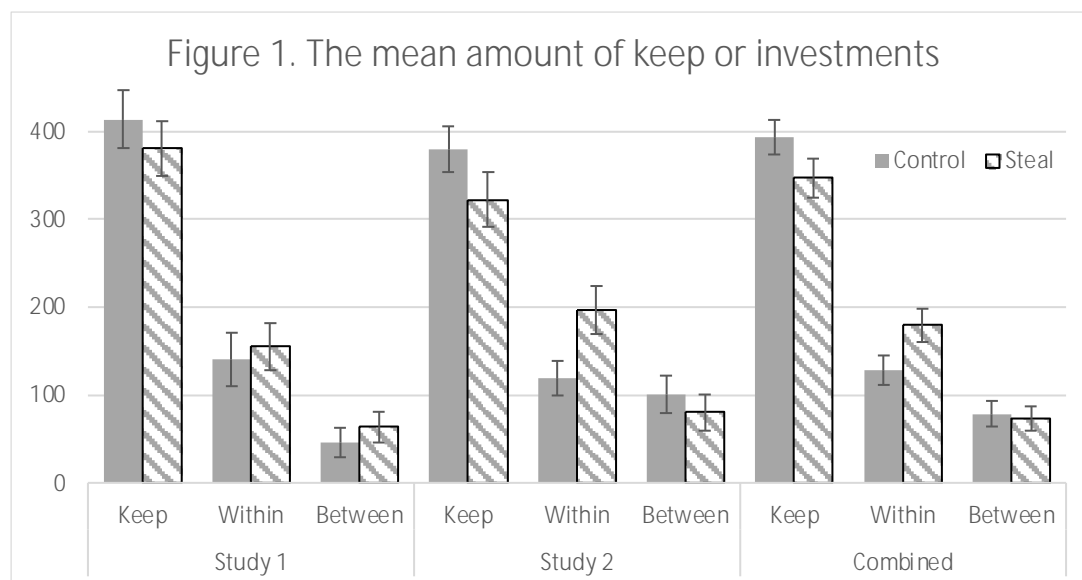
（3）集団間攻撃と集団内協力の独立性

研究1の結果、集団対抗先制攻撃ゲームと個人間の外集団に対する先制攻撃との間には $r = .329$ の有意な正の相関が見られた。また、個人間の外集団に対する先制攻撃と公共財供給ゲームでの集団内協力との間には $r = -.241$ の有意な負の相関が見られた。一方、集団対抗先制攻撃ゲームと公共財供給ゲームの間の相関は $r = -.007$ とほぼ無相関の値が見られた。

研究2の結果、IPD-MDの集団内プールへの投資（集団内協力）は、その3年前および5年前に実施した公共財供給ゲームでの投資（集団内協力）と $r = .569$ および $r = .542$ という高い正の相関を示した。一方、IPD-MDの集団間プールへの投資（集団間攻撃）は3年前および5年前に実施した公共財供給ゲームでの投資（集団内協力）と $r = -.034$ および $r = .026$ といずれもほぼ無相関の値を示した。集団対抗先制攻撃ゲームでの外集団攻撃との相関は、3年前および5年前に実施した公共財供給ゲームでの投資（集団内協力）とは $r = -.031$ および $r = -.043$ とほぼ無相関の値を示した。また、集団対抗先制攻撃ゲームでの外集団攻撃とIPD-MDの集団内プールへの投資との相関は $r = -.095$ 、集団間プールへの投資との相関は $r = .080$ と、こちらもほぼ無相関の値を示した。これらの結果は、集団間の攻撃傾向と集団内の協力傾向が独立の現象であることを示しており、共進化モデルの予測を支持しない結果である。

（4）フレーム非依存的な外集団攻撃の不在

IPD-MDを用いた2つの実験研究の結果（Figure 1）、まず、集団間プールへの投資額に対するフレームの効果は見られなかった。研究2において、盗むフレームが集団内プールへの投資額を有意に高めたが、研究1では集団内プールへの投資額に関してもフレームの効果は見られなかった。また研究1でも研究2でも、フレーム条件にかかわらず、集団間プールへの投資額は集団内プールへの投資額を有意に下回った。これらの結果は、内集団の利益を増やすというフレームを用いても、外集団攻撃が生じない可能性を示している。この研究はMifune (2022) として Scientific Reports 誌に掲載された。



（5）その他

その他にも、以下の研究を論文化した。すなわち、最小条件集団における一回限りの先制攻撃ゲームでは内集団バイアスが生じないこと (Mifune, Simunovic, & Yamagishi, 2017)、国籍カテゴリーを用いた場合に相手国のステレオタイプに応じて先制攻撃の内集団バイアスが生じること (Jing, Gries, Li, Strivers, Mifune, Kuhlman, & Bai, 2017)、社会的支配志向性の個人差が集団間葛藤の宥和を阻害すること (Mifune, Inamasu, Kohama, Ohtsubo, & Tago, 2019)、攻撃行動の一種である罰行動は集団内ではネガティブに評価され、個人間ではポジティブに評価されること (Mifune, Li, & Okuda, 2020)、病原性への脆弱性が内集団バイアスに影響するとの知見にはまだ未解明な部

分が残っていると指摘するレビュー (Imada & Mifune, 2021)、などである。

引用文献

- Choi, J. -K., & Bowles, S. (2007). The coevolution of parochial altruism and war. *Science*, 318, 636-640.
- Imada, H., & Mifune, N. (2021). Pathogen threat and in-group cooperation. *Frontiers in Psychology*, 12, 678188.
- 神信人・山岸俊男 (1997). 社会的ジレンマにおける集団協力ヒューリスティクスの効果. *社会心理学研究*, 12, 190-198.
- Jing, Y., Gries, P. H., Li, Y., Stivers, A. W., Mifune, N., Kuhlman, D. M., & Bai, L. (2017). War or peace? How the subjective perception of great power interdependence shapes preemptive defensive aggression. *Frontiers in Psychology*, 8, 864.
- 三船恒裕 (2016). 攻撃力の非対称性に基づく外集団攻撃: 先制攻撃ゲームを用いた最小条件集団実験. *日本社会心理学会第 57 回大会*, 52
- Mifune, N. (2022). Null results for the steal-framing effect on out-group aggression. *Scientific Reports*, 12, 686.
- Mifune, N., Inamasu, K., Kohama, S., Ohtsubo, Y., & Tago, A. (2019). Social dominance orientation as an obstacle to intergroup apology. *PLoS ONE*, 14(1), e0211379.
- Mifune, N., Li, Y., & Okuda, N. (2020). The evaluation of second- and third-party punishers. *Letters on Evolutionary Behavioral Science*, 11, 6-9.
- Mifune, N., Simunovic, D., & Yamagishi, T. (2017). Intergroup biases in fear-induced aggression. *Frontiers in Psychology*, 8, 49.
- Simunovic, D., Mifune, N., & Yamagishi, T. (2013). Preemptive strike: An experimental study of fear-based aggression. *Journal of Experimental Social Psychology*, 49(6), 1120-1123.
- Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149-178.
- Yamagishi, T., Jin, N., & Kiyonari, T. (1999). Bounded generalized reciprocity: Ingroup boasting and ingroup favoritism. *Advances in Group Processes*, 16, 161-197.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 11件／うち国際共著 6件／うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Mifune Nobuhiro, Li Yang, Okuda Narumi	4. 巻 11
2. 論文標題 The Evaluation of Second- and Third-Party Punishers	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Letters on Evolutionary Behavioral Science	6. 最初と最後の頁 6~9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5178/lebs.2020.72	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Yokota Kunihiro, Tsuboi Sho, Mifune Nobuhiro, Sugiura Hitomi	4. 巻 10
2. 論文標題 A Conceptual Replication of the Male Warrior Hypothesis Using the Outgroup Threat Priming Method	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Letters on Evolutionary Behavioral Science	6. 最初と最後の頁 1~3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5178/lebs.2019.67	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Mifune Nobuhiro, Simunovic Dora	4. 巻 42
2. 論文標題 Towards the elucidation of evolution of out-group aggression	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Behavioral and Brain Sciences	6. 最初と最後の頁 32-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S0140525X19000943	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 MIFUNE Nobuhiro, LI Yang	4. 巻 61
2. 論文標題 TRUST IN THE FAITH GAME	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 PSYCHOLOGIA	6. 最初と最後の頁 70~88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2117/psysoc.2019-B008	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Mifune Nobuhiro, Li Yang, Okuda Narumi	4. 巻 11
2. 論文標題 The Evaluation of Second- and Third-Party Punishers	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Letters on Evolutionary Behavioral Science	6. 最初と最後の頁 6~9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5178/lebs.2020.72	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Komiya Asuka, Ohtsubo Yohsuke, Oishi Shigehiro, Mifune Nobuhiro	4. 巻 158
2. 論文標題 Providing compensation promotes forgiveness for replaceable, but not irreplaceable, losses	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Journal of Social Psychology	6. 最初と最後の頁 680-693
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/00224545.2017.1395792	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 三船 恒裕、横田 晋大	4. 巻 34
2. 論文標題 社会的支配志向性と外国人に対する政治的・差別的態度：日本人サンプルを用いた相関研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 94-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14966/jssp.1725	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Mifune Nobuhiro, Inamasu Kazunori, Kohama Shoko, Ohtsubo Yohsuke, Tago Atsushi	4. 巻 14
2. 論文標題 Social dominance orientation as an obstacle to intergroup apology	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 e0211379
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0211379	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Mifune Nobuhiro, Simunovic Dora, Yamagishi Toshio	4. 巻 8
2. 論文標題 Intergroup Biases in Fear-induced Aggression	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2017.00049	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Jing Yiming, Gries Peter H., Li Yang, Stivers Adam W., Mifune Nobuhiro, Kuhlman D. M., Bai Liying	4. 巻 8
2. 論文標題 War or Peace? How the Subjective Perception of Great Power Interdependence Shapes Preemptive Defensive Aggression	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 864
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2017.00864	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Imada Hirotaka, Mifune Nobuhiro	4. 巻 12
2. 論文標題 Pathogen Threat and In-group Cooperation	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 678188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2021.678188	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件(うち招待講演 2件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 三船恒裕
2. 発表標題 日本における社会的支配志向性と差別的態度との関連
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第28回大会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mifune Nobuhiro
2. 発表標題 Ingroup identity, ingroup cooperation, and outgroup aggression
3. 学会等名 The Annual Society for the Personality and Social Psychology Convention (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三船恒裕
2. 発表標題 信念、あるいは人間観の社会心理学
3. 学会等名 第1回犬山認知行動研究会議
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関